

地域産業研究会 15 年の歩み

地域産業研究会代表 伊 藤 恒 雄

I はじめに

地域産業研究会はこれまで見逃されてきた地域資源を見つけ出し、それを活用した地域振興や地域産業の可能性を研究することを目的に平成 9 年 4 月北海道技術センターの承認を得て設立されました。以来、15 年間にわたり様々な分野の技術士が幅広い活動を続けてきました。

活動は、北海道の基幹産業である農林水産業や環境に関わる課題を取り上げ、北海道民の目線、発想を重視し、地域の人たちとともに考え、ともに行動することにより、地域の活性化に寄与してきました。

研究会活動は、恒例会、分科会(近年は「エゾシカ分科会」「地域活性化分科会」「資源・環境・健康分科会」)、現地見学会の 3 つの柱からなり、活動記録を見ても多彩な活動が行われてきました。

恒例会では、「食の討論会」として、主として「食」に関わる講演会を行ってきました。研究会外部の講師による講演会と研究会内部の技術士による講演会とを交互に開催し、多様な分野の講師による講演会が開催され、回数も 15 回を数えました。

分科会活動においては、「エゾシカ分科会」は、農林被害をもたらすエゾシカを北海道固有の地域資源と位置づけ、これを活用した養鹿産業を育成し、特に中山間地域の活性化に繋げることが、エゾシカ被害の軽減に寄与することから、これらのシステム・技術開発等について研究をしてきました。なかでも北海道における養鹿産業の可能性をまとめた提言集として「エゾシカ飼うべ」を平成 16 年 4 月に発刊し、大きな反響を得ました。

「地域活性化分科会」は、北海道の過疎地における地域の産業、地域の活性化を促すための研究・活動を行ってきました。主として後志管内寿都町をモデ

ルとして、行政・住民の参画を得ながら活動を進めてきました。地元イベントや札幌で開催される物産展などへの参加・協力、地元で開催されるワークショップや懇談会を実施してきました。この活動がきっかけとなり、現在は隣接する島牧村、黒松内町との交流も行われ、活動の範囲が広がってきました。



弁慶岬のワカメ漁(isamu12)

「資源・環境・健康分科会」は、札幌市東区の鉄東地区の地域健康づくり活動への関わりから始まり、丘珠地区における親子体験農場への支援、バイオマス廃棄物の垂臨界肥料化技術開発への挑戦等、技術士ではない一般の市民の方々とともに活動し、その活動の輪が大きく広がりました。

また、現地見学会では北海道内各地を訪問し、行政をはじめ、地域の産業や環境に関わる人たちとの交流や研修を行ってきました。

このように地域産業研究会では、北海道内各地で様々な活動を行ってきましたが、平成 24 年 3 月 31 日をもって研究会を解散し、これまでの研究会活動を継承し、新たに「食産業研究会」と「エゾシカ研究会」が発足することとなりました。

そこで、これまでの地域産業研究会 15 年間の活動を総括・記録し、この活動の記録が、貴重な資料

として今後の新しい研究会活動の参考となり、技術士の活動がさらに広がり、活発化し、北海道の産業に貢献できることを願っております。（伊藤恒雄）

Ⅱ 活動をふりかえって

Ⅱ－１ 全体活動

１ 総会・特別講演

地域産業研究会は、設立時の活動の指針は、「地方自立が求められる今日、北海道の基幹産業とされている農林水産業とそれらを経済基盤とする地域社会は、中央依存型システムから脱皮し、自らの力で考え行動することが必要となっています。その中で地域社会、地域産業、そして自然環境との調和はどうあるべきかを、既成概念に囚われることなく考え行動しよう」としました。

定期総会は、毎年４月前後に開催され、過年度の活動報告、会計決算報告の他、各事業年度の具体的な活動計画及び予算計画を審議してきました。また、２年に一度、幹事等役員の選任を行ってきました。

設立以降の代表、副代表、幹事長は次表のとおりです。また１０名前後の幹事を選任し、様々な活動の審議や推進を担ってきました。活動の審議は、毎年３回程度開催する幹事会で検討してきました。

設立以降の体制

年度	総会日	執行体制		
		代表	副代表	幹事長
1997年度	1997／6／20	船越 元	油津雄夫	岩崎元彦
1998年度	1998／4／17	船越 元	油津雄夫	岩崎元彦
1999年度	1999／4／22	船越 元	油津雄夫 野本 建	斉藤和夫
2000年度	2000／6／26	船越 元	油津雄夫 野本 建	斉藤和夫
2001年度	2001／5／9	船越 元	油津雄夫 野本 建	斉藤和夫
2002年度	2002／1／28	船越 元	油津雄夫 野本 建	斉藤和夫
2003年度	2003／5／26	船越 元	油津雄夫	斉藤和夫
2004年度	2004／2／23	船越 元	油津雄夫	斉藤和夫
2005年度	2005／3／4	船越 元	油津雄夫	斉藤和夫
2006年度	2006／4／12	伊藤恒雄	板垣恒夫	今井淳一
2007年度	2007／3／23	伊藤恒雄	板垣恒夫	今井淳一
2008年度	2008／4／8	伊藤恒雄	板垣恒夫	今井淳一
2009年度	2009／4／8	伊藤恒雄	板垣恒夫	須川清一
2010年度	2010／4／16	伊藤恒雄	板垣恒夫	須川清一
2011年度	2011／4／14	伊藤恒雄	板垣恒夫	須川清一
	2012／3／26			

総会時には、会員以外の方にも広く案内し、次表の通り、当研究会の活動に関係する様々な分野で広く活動しておられる諸先生にご講演を頂きました。

最終の解散総会は、2012年３月26日に開催され、当研究会の解散と新たに「食産業研究会」及び「エゾシカ研究会」の設立を承認しました。

特別講演一覧

年度	特別講演者	テーマ
1997年度	北海道空知支庁 石田部長	世界の農業と食料事情
1998年度	当研究会 野本 建	北海道の能力分析
1999年度	—	—
2000年度	北海道通産省産業部 三木一弘	中心市街地活性化法について
2001年度	留萌市 吉田俊昭	ゴミがおいしい、ゴミで人づくり、まちづくり
2002年度	当研究会 五十嵐敏彦	ニュージーランド養鹿産業視察団報告
2003年度	北海道大学大学院 浅野行蔵	バイオアイランド北海道、技術士の仕事の成果と方向性
2004年度	食農わくわくネットワーク 長尾道子	私が大好きな農村のあれこれ
2005年度	当研究会 五十嵐敏彦	ニュージーランド養鹿視察ツアー特別報告
2006年度	小樽商科大学 海老名 誠	アジアの経済発展と日本・北海道
2007年度	ランゾ・フォー・ザ・フューチャー 津島 慧	山河あり、ふるさとに夢をかけた男 中田鉄治
2008年度	酪農学園大学 十場信司	北海道農業の展望—循環型農業を求めて
2009年度	島牧村 藤澤 克	豊かな資源と人の温もりを育む村づくり
2010年度	後志森林管理署 木谷三男	森林・林業の動向について
2011年度1	北海道教育大学 並川 寛司	北海道を北限とする樹木の生態—フィールドでの調査でわかったこと
2011年度2	酪農学園大学 加藤敏文	環境配慮型製品が売りにくい理由

２ 食の討論会

全体活動は、当初は定例会として２カ月に１度程度の集まりを設けていましたが、2005年度から定例会のテーマを食に絞って「食の討論会」を開催してきました。「食の討論会」は、単に講演を聞くだけではなく、講演を通して提示された内容について、参加者が様々な視点から意見を出し合い、討論することにより深く理解することを目的として開催してきました。討論会は全１５回を数え、各回の講師とテーマは次表のとおりです。

食の討論会

回数	開催日	講演者	テーマ
第１回	2005/7/25	当研究会会員 鎌田真次、船越 元	身近にある食料問題
第２回	2006/1/30	農業応援団あぐり・びれっじ 小田たず子	農業ビジネスの可能性
第３回	2006/6/16	釧路公立大学 小磯修二	地方発 環境再生ベンチャー企業の挑戦
第４回	2006/11/14	ファームエイジ㈱ 小谷栄二	新たな食と農業への挑戦
第５回	2007/6/4	幌加内町 森合 廣	そばを活用した町づくり
第６回	2007/10/24	北海道の食自給ネットワーク 大熊久美子	これからの北海道農業に期待するもの
第７回	2008/2/5	㈱アップデート 井餘田浩司	食と地域活性化を繋ぐ
第８回	2008/7/23	南タカシマファーム 高嶋浩一	お米でオンラインワンに…“これまで20年の挑戦、そしてこれから”
第９回	2009/7/10	当研究会 板垣恒夫	南後志 北限ナナ林見学会に向けて
第１０回	2010/7/10	白糠町 武藤浩史	羊を通して食の問題を考える
見学会 準備	2011/9/17	当研究会 伊藤恒雄	地域資源を考える—黒松内町の多様な資源
第１１回	2011/11/29	小樽商科大学 相内俊一	過疎と高齢化と財政難の北海道地方都市は活力をとりもどせるか
第１２回	2012/2/4	当研究会 橋本昭夫、大野和彦、番匠義弘、鈴木敏勝	亜臨界肥料化技術で北海道を元気に
第１３回	2012/7/5	酪農学園大学 筒井静子	地域連携による農産加工
第１４回	2012/9/5	当研究会 豊合敏雄	水産地域資源の販路拡大と技術士のできるこ
第１５回	2012/10/23	北海道 後志総合振興局 鳴海拓史	後志における「食のブランド化」の取組について

講師は、食に関する研究者や関係する先駆的な取組を実践しておられる方をお招きしてきました。また、研究会の会員等が専門分野での講演を行い、知見を広めるとともに研究会会員間の交流を深めるための討論会も開催してきました。

討論会では、毎回いろいろな角度から意見が出され、討論を通して互いに考え理解を深めることができました。さらに、講演に引き続き情報交換会では講演からの熱い議論が引き継がれて、様々な情報や意見が交換されました。



(須川清一)

3 現地見学会

地域産業研究会の活動では、現地での観察や調査、そして地域交流が重要な要素を占めることから「多彩な見学会」を開催してきました。

当研究会の見学会は大きく、1)先進農業地や研究所などを訪れ、新しい知識や技術の習得に役立てるもの(見学・視察)、2)現地との触れ合いを通して行うもの(研修・学習・体験・指導)、3)現地の協力のもとに現地をよく理解するために行うもの(観察・調査)、4)人的なつきあいからより濃密に地域対応を図ろうというもの(交流)、に分けられます。

全体活動としての見学会：記憶に残る見学会には、平成9年に開催した「洞爺村の農業・現地視察・討論会」があります。農家や大学教授の参加のもと、現場を見ながら、様々な意見を交わす熱のこもった見学会でした。平成11年には技術士センターと合同で開催した「エゾシカを食べながら地域振興を考えよう」もあり、西興部村・下川町等を訪れ、エゾシカに関する貴重な体験をしました。平成12年にも合同での黒松内町・寿都町方面の見学会を開催しました。平成13年にはニュージーランド養鹿産業視察と「循環型社会構築に向けた地域の取り組み」として留萌市訪問の見学会を開催しました。平成14年には洞爺湖・鹿部町方面で「漁業を育て、地域を育

てる」との課題での見学会を開催しました。平成20年には「ミズナラ巨木と月越山脈のブナ林」見学会を開催し、最北限のブナ林のある寿都町を訪れました。

分科会活動としての見学会：地域活性化、エゾシカ、資源・環境・健康、の3分科会ではそれぞれに地域に入り、視察・調査・交流を行い、多くの成果をあげてきました。地域活性化分科会では寿都町での関わりをはじめとして後志3町村(寿都町・黒松内町・島牧村)での農林漁業文化活動に貢献してきました。北限ブナ林の調査活動・寿都町マリビジョン策定協議会オブザーバー参加・寿都町歴史資源調査・黒松内町への農業支援活動、島牧村での植樹会参加と農家との勉強会を開催しました。浜ボウフウ実験栽培での豊富町訪問などを行いました。エゾシカ分科会においても日高地方の新冠町・静内町での現地視察・調査を行いました。

15年間にわ

たる地域産業研究会「見学会活動」は、活動史に示す通り非常に大きな実践経験を残してきました。これは分



科会報告からもくみ取ることができます。大事に積み重ねてきた地域との関わりをさらに発展へとつなげていくことが大切であると考えています。

(板垣恒夫)

Ⅱ-2 分科会活動

1 エゾシカ分科会

「……エゾシカと共に(中略)北海道に住む人が楽しく暮らせるように……」。これはエゾシカ分科会の始まりとも言える平成11年3月のシンポジウム(北海道技術士センター主催)「試される大地・エゾシカとの共生 一明るい北海道の未来に向けて一」で挨拶された油津実行委員長の一節です。実質的なエゾシカ分科会の活動が、このシンポジウムの準備から始まったと言えます。当時(シンポジウム開催まで)はエゾシカ分科会の誕生前で、エゾシカに興味を持った数人の有志が、「あ～でもない、こ～でもない」と

グチグチ意見を述べ合うだけの時期ではありましたが、そこから地域で問題になり始めていたエゾシカを逆手に、何か打開策はないものか探り始めました。

その中で、エゾシカの現状を整理しようと企画したのが「エゾシカシンポジウム」です。今考えればかなり無謀な計画だったかもしれませ



んが、当時はメンバーの勢いそのままに突っ走った気がします。結局、大学や研究機関の研究者、道や地域の行政マン、自然保護論者や猟師など、広範な関係者を巻き込んで、それぞれの課題を指摘して頂きました。しかも、当時から我々サイドは駆除一辺倒ではなく、地域資源として活かす道を模索していましたから、どの立場の見解も我々と同じものはありませんでした(この状況は今も変わらず、道やエゾシカ協会の考えと分科会の考えは見解を異にしています)。しかし、当時の現状を深く理解するのに大いに役立ったことは間違いありません。このシンポジウムの成功を弾みに、同年 6 月、地域産業研究会初代会長の船越技術士を中心に、技術士と技術士補 11 名でエゾシカ分科会を立ち上げ、現在に至ります(メンバーの入れ替えを繰り返し、現在、在籍会員 12 名)。その間、通算 45 回におよぶ分科会を開催し、活動を続けてきました。

活動のうち最も大きな出来事は、ニュージーランドへの取材旅行と、分科会の研究成果をまとめた普及書「エゾシカ飼うべ」の刊行です。

ニュージーランドは元々、シカの居ない島でしたが、イギリス人の入植に併せて移入され、爆発的な増加と農林業被害の発生から、野生化したシカを捕獲し完全養鹿に移行したサンプルです。北海道のエゾシカは移入種でこそありませんが同様の経緯を辿っており、これを活かす方策を北海道スタイルとして提唱しました。発刊当時(H16)、道内では害獣とみなしたエゾシカに対し、狩猟・駆除による銃

捕殺のみを行っていましたが、我々の提唱・普及もあってか「生態捕獲」と「短期肥育」を組み合わせた「一時飼養」や「衛生マニュアル」などの導入が進み、多少なりともエゾシカを活かす取り組みが行われるようになりました。

しかし、発刊から 8 年を経た現在、「エゾシカの飼育」が業として安定した状態には程遠く、「養鹿」が地域に根付いた新たな産業となる



知床エゾシカファーム

には更なる改良と進歩が必要です。

具体的なテーマは以下の通りで、これを次なるステップとし、生まれ変わった「エゾシカ研究会」として再出発する所存です。

- ・「シカ肉」のブランド化
- ・未利用部位や廃棄部位を活用した製品開発や研究
- ・低コスト化を目指した効率的な捕獲技術や飼育技術の向上
- ・販路拡大のための市場開発
- ・「エゾシカ産業の振興」に向けた行政・議会への提言

(五十嵐敏彦)

2 地域活性化分科会

(1) 活動の流れ

地域活性化分科会は、平成 10 年から後志管内の寿都町に活動パートナーになって戴き地域活性化の勉強を続ける内に、平成 20 年からは北限のブナ林再生でつながる黒松内町、島牧村を加えた南後志 3 町村を対象にした活動に範囲を拡げてきました。

地域と「共に学び、共に感じ、共に創る」をモットーに、見学会や意見交換会を通じ町民の方々と町村の活性化を語り合ってきました。

(2) これまでの活動から

基本的な活動体制は、約 20 名の会員と役場の課長さんを中心とする寿都町の皆さんや大学の研究者などとのメンバーで、森林、河川、海・漁港、観光・市街地・農業の 4 つのグループに分かれ、それぞ

れの分野の調査から始まり、それらを活性化提案にまとめることからスタートしました。グループごとのその後の活動内容は下表の通りです。

区 分	組 合	主 要 な 活 動	担 当 団 体
森・川・海	森 林 G	寿都の森林調査	寿都町産業振興課 寿都町内有志・企業 北大、道教育大 法政森林管理課
	河 川 G	自然体験学習 (リージョナルステート研究会 自然体験学習部会主催)の活動	寿都町教育委員会 寿都小中学校
	海・漁港 G	ハマボウフウ試験栽培	定山温泉観光交流所 札幌市内農家有志
	観光・市街地・漁業 G	地域資源調査	寿都町商工観光課 寿都町観光協会 寿都高校
	共 創 G	インターネット写真館の運営 (サッポロファクトリー主催)	寿都町商工観光課 寿都町観光協会 寿都町漁協 寿都町生涯学習課

(3) 活動の成果

各グループ活動において、それぞれ一定の成果を得てきました。例示をすれば、

①森林グループ：寿都町では役場関係者や町民有志、大学、森林管理署の方々と森林調査を行ってきました。その中でブナ北限の里としては、蘭越町やお隣の黒松内町がまちづくりのシンボルとして先行していましたが、寿都町にも更に北に当たる場所にブナ林が存在することや、北海道一太いミズナラの巨木の発見もありました。

これらは、全国紙の地方版や町の広報誌にも掲載され、自然環境の豊かさを再確認することに繋がりました。また、町民有志による「Club 風のがっこう」という組織が立ち上がり、町民を対象とした森林学習や海岸の清掃奉仕など、山と海の環境を考え

る活動を行っています。これまで漁が気になって海の方ばかり見ていた町民が、最近は山の方も見るようになってきたという役場の方の言葉が印象的です。

②海・漁港グループ：ハマボウフウの試験栽培は、露地栽培は港湾埋立地の飛散防止として植えたり、市民農場を借りて行いました。軟化栽培は自前での株の育成が間に合わないことから、栽培農家から株を購入しました。これを発砲スチロールの箱の栽培キットに植え込み、清掃工場の余熱や温泉熱を用いて冬季の軟化試験栽培を試みました。収穫は期待通りで、食堂や定山温泉のホテルなどでメニューに、軟化栽培方式で収穫した物を提供し、概ね好評でした。現在は、関心のある札幌市内の農家に実績の成果を提供し、そこでは栽培を継続しています。

③観光・市街地・漁港グループ：寿都町は江戸時代の始めから鯺漁が盛んに行われ、その面影を残す建物、古いお寺、大小7つの漁港など、古くからの産業と文化を伝える施設が数多く存在し、地域資源調査ではそれらをマップと共に紹介しています。

④共創グループ：当初、河川グループが参加して朱太川の生態学習から始まり、最近はメニューも広がってサツマイモ栽培まで、子どもたちの驚きと喜びの歓声に包まれる自然体験学習はリージョナルステート研究会自然科学教育分科会が主体となって進めてきている事業ですが、当時文部科学省で進めていた理科支援員等配置事業(SCOT 事業)に一役買うことにもなりました。他にはマリナビジョン 21 策定協議会へのオブザーバー参加、寿都を写真で紹介するインターネット写真館の運営、各種イベント協力なども行ってきました。

⑤その他：分科会全体として、寿都町のかき祭りやお魚市、島牧村「森・川・海づくり」植樹会、黒松内町の「ビーフ天国」などイベントの機会を利用

した意見交換を継続しています。又、各町村から検討の依頼を受けた個別の



寿都の特産物の販売(札幌)



北海道で一番太いミズナラ

課題に専門の技術士からアドバイスを行ってきました。

寿都町から始まった南後志 3 町村の活性化に関する活動の中で感じられることは、各自治体の個性の違いです。地理、地形、気象などの自然環境の違いは勿論、それらが動植物の生態ばかりでなく、産業、歴史、文化、交通など人為的な営みにも際立った特徴を与えていることに興味と関心を抱くものです。3 町村の自然環境と地域の営みの間に相関性を見出すことができないものかと考えています。

今後は食の研究の中で、新たな視点で魅力的な資源の発掘を継続すると共に、地域を担う将来の人づくりのためにこれからも協力体制を保っていきたいと考えています。（柴田 登）

3 資源・環境・健康分科会

(1) 分科会設立と経緯

資源・環境・健康分科会は、地域活性化分科会の活動の一環から、札幌地区を対象にスタートし、平成 19 年に 15 名程の会員により設立されました。

活動の契機は、札幌市東区の鉄東地区の地域健康づくりです。ここでは、地域の医師や保健センターなどが一体となった地域住民主体の地域健康づくりが盛んに試みられ、従来の常識を破る「大都会における住民主体の地域健康づくり」として国のモデル事業の認定を受け活動を進めていました。

(2) 東区丘珠地区と親子体験農場

東区地域への技術士の具体的活動は、東区丘珠地区で親子体験農場の活動を農業、環境、健康、教育の面から技術士が保健の専門家と共に行うことから始めました。

また、住民リーダーから、「アレルギーの孫のために新篠津村の有機農家から有機農産物を購入している。地元東区でも健康な野菜が出来ればいい」との話が出ていました。一方、農家でもある丘珠地区の地域健康づくり実行委員長からは「丘珠地区は歴史ある玉葱の名産地だが、化学肥料、農薬で農地が荒れてきている。土地を提供するから子供教育のためにも有機栽培体験農場はどうだろう」との相談がありました。

そこで「東区内の家庭から出される生ごみを、焼

却しないで、有機肥料・健康野菜・流通販売・東区家庭食卓へのサイクルを、地域通貨を媒介に出来ないか？」との発想から、丘珠親子体験農場をスタートし、今年で 10 年目を迎えようとしています。この間、会員は毎週末、体験農場に出向き、子供達や地域住民との交流を続けてきました。



親子体験農場

東区では、この親子体験農場もきっかけとなり、一部の町内会で分別収集された家庭生ごみが、札幌市の支援を得て肥料化されるに至っています。

(3) 健康と分科会活動

分科会は、健康も大きなテーマであり、地域の医師、保健婦、栄養士、食品衛生監視員等、外部専門家も参加いただき、学習会を重ねてきました。

ところが、平成 20 年ごろ、化学肥料と有機肥料で収穫された農産物に健康成分の差はないとの国際学会発表がありました。それでも、技術士の「それでは、何故、有機野菜は子供のアレルギーに効果あるのか？本当はあるのではないのか？」との疑問。農業試験場研究職員からの「有機野菜と健康増進とを結び付ける研究をしていますから、頑張りましょう」との励ましもあり、分科会活動を継続しました。

(4) 新たな挑戦：バイオマス廃棄物の亜臨界肥料化

平成 21 年から、効率的な新たな有機肥料化技術の開発支援も始めました。高温高压の亜臨界状況において、数時間で家庭生ごみや下水道汚泥等をアミノ酸肥料にする亜臨界肥料化技術の開発です。従来の堆肥化技術とは違う新たな肥料技術です。

化学肥料を上回る栽培効果があるアミノ酸肥料の出現を、NPO 法人北海道資源循環研究所等と携わ

る事が出来ました。

(5)南空知地域農家(市民との関わりとごみ処理問題)

平成 22 年と 23 年、試作された亜臨界肥料が、丘珠体験農場や道内農家でも実験栽培に供されました。その後、亜臨界肥料の栽培試験を通じて農家との交流が始まった南空知地方では、亜臨界肥料栽培に協力頂いていた農家を中心に、南空知地方の 3 市 2 町の市民からなる「バイオマス循環を進める南空知市民会議」が設立されました。この会議から当分科会に支援要請があり、多くの勉強会等に参加しました。

化学肥料でもなく堆肥でもない「第 3 の肥料ともいえる亜臨界肥料化」は、関心と呼び約 80 名の市民・農家等の皆さんが参加する亜臨界肥料シンポジウムは、昨年、岩見沢市で開催されました。

このシンポジウムでは、札幌の技術士が、大都市札幌市と岩見沢市とのごみ処理方法の違い等を説明、市民の皆さんにごみ処理の基本のあり方を考えて頂きました。その上で、空知地方の技術士を中心とし、今後の岩見沢市のごみ処理方法のあり方等について提言をさせていただきました。

今後は、この間の議論積み重ねによる市民、市議会、行政の連携が、その結論を結びつけたと考えています。(橋本 昭夫)

Ⅲ 研究活動をともにして

Ⅲ－1 寿都町長 片岡春雄

貴会が設立 15 周年の節目を迎え、新たなスタートをきられるにあたり、一言、感謝の言葉をと筆を執ります。振り返りますと、貴会とのご縁は、貴会の地域活性化分科会が平成 11 年に設立された際、寿都を活動拠点として選んでいただいたことが最初のきっかけでした。1 年目は寿都を知ろう、2 年目は寿都を調べよう、3 年目は寿都を考えよう、をテーマに様々な形で事業に参加、ご助言をいただきました。当時、私も農政課長としてメンバーの皆さんと交流を持たせていただいたことを懐かしく思い出します。

その後も活動は広がり、美しい海作りをメイン

テーマとして「海、山、都市、川」の 4 つの視点から研究、調査をいただき、貴重なご提言をいただきました。それらが実を結び、全町クリーン大作戦や植樹祭、ECO 寿都、道の駅と周辺の市街地整備、朱太川水域の環境保全など様々な事業へと展開しております。貴会によって蒔かれたたくさんの“種”は、経済、産業、環境、教育などまちづくりの様々な分野で“芽”を出しつつあります。しかし、それらを育て、“花”開かせるのは、地元住民と行政の協働であると考えております。地域に在る宝を再発見し、都市との交流を図りながら、活力あるまちづくりをすすめて参りたいと思います。

13 年余の永きにわたり、貴会のメンバー御一人おひとりが、まったくのボランティアで幾度となく足を運んでいただき、地元住民が気づかなかったものを見つけ、熱意を持って教え、導いていただいたことに深く感謝し、これから大切に育んでいく所存です。今後ともご支援、ご指導いただければ幸いです。

最後になりましたが、再出発される研究会の更なる発展をご祈念し、お礼の言葉といたします。

Ⅲ－2 北海道大学大学院地球環境科学研究院 准教授 春木雅寛

地域産業研究会は 1997 年に設立され、地域、産業、環境をキーワードに、問題を把握し、未来を展望し種々提言されてこられ、このたび 15 年間の活動を終えるとのこと、ご苦労様と申し上げます。

私は技術士のお一人である板垣恒夫氏に研究会の活動の一環であると唆されて、2006 年夏期に寿都町樽岸の森林調査に同行したのがきっかけで参加しました。その後 2007 年からは時間を割いて学生時代からの課題であった最北限のブナ林を寿都町、黒松内町、島牧村で探るようになりました。お陰様で寿都町にあるブナ林では、それまでほとんど無かった調査データが蓄積していきました。当初、将来を見越したブナ北限の町作りを進めていた隣の黒松内町にはさまざまなブナデータが集まっていたことから、寿都町ではあまり関心は高くなかったようで、漁業の町には関係ないとか、今でも研究者の気まぐれと思っておられる町の人もおられるかもしれません。私も板垣氏とともに 2007 年以降、20 回

あまり調査に赴いて、毎年北方森林学会などで成果を発表してきました。しかし、地に足がついた種々の活動は町民が自分たちの足で歩き出さない限り定着、発展しないであろうから、このようなデータは今後生きてくることがあるともいえないような気がしています。ただ、その一環として地域産業研究会の以下のような活動に同行することが出来ました。

2008 年 4 月 22 日「ミズナラ巨木と月越山脈のブナ林」見学会にはカンジキを履いて参加し、11 月 11 日には島牧村の賀老台地のブナ更新調査、2009 年 1 月 29 日には 3 町村と後志森林管理署(木谷三男署長)との交流会、9 月 11 - 12 日は 1 泊の北限ブナ林見学会で、黒松内町ブナセンターの斎藤均氏の案内で添別ブナ林、さらに寿都町月越のブナ林、島牧村ブナ林を見学し、後半は私もいろいろ説明役をさせていただきました。2007 年からの種々の交流活動が、国道から少し離れた港沿いに出来たユニークな道の駅「みなとまーれ寿都」の設置につながり、町内外の人たちの情報交換や交流が盛んになったと聞きました。印象的な出来事であり、ここに足を運ぶのは 3 町村訪問の楽しみの一つとなりました。

このような研究会活動が新局面を迎え、近年の地域状況に対応した新たなテーマに向かって、一旦会を解消し再出発されとのこと、本研究会の更なる発展をご祈念する次第です。

Ⅳ 活動に参加して

Ⅳ- 1 エゾシカ分科会 鎌田貢次

平成 14 年に研究会に参加したのは、札幌に異動になった機に「多様な人を知り、意見を聴く」ため、食の討論会やエゾシカ分科会に参加しました。皆さんの熱い思いに感化され、つい、資料収集や勉強をしてしまい、お陰様で、網走や帯広に転勤した際には首長さん達とエゾシカなどの課題について熱い議論が出来ました。これからも、研究会活動によって、具体的な成果を社会に出すことが必要ではないかと考えているところです。

Ⅳ- 2 地域との交流の継続こそ技術士が出来る 「社会貢献」 岩崎元彦

「地域活性化分代会」では、会員の積極的な技術的交流の継続が最大の研究成果でした。特に福島に帰郷した会員が、寿都町へ新規入植を果たし 3 年目を迎えています。これも町との「信頼関係」により果たせたものであり、震災後にも、町をあげて支援して頂いています。これからも技術士(技術者)として出来る事で、彼及び寿都町との技術交流を続けて行こうと考えており、その基盤は「地域産業研究会」が作って頂けたと感謝しております。

Ⅳ- 3 研究会に参加して 細川康司

2006 年度からエゾシカ分科会へ入会し、いきなり幹事を命じられ、地域産業研究会のさまざまな活動に参加することとなりました。分科会では道内におけるエゾシカ問題はピンチをチャンスに変える視点から研究に取り組んでおられた先輩たちに感心するばかりです。また構成員の多くは農業部門の技術士であったことから、情報交換を通じて、異分野の広い知識を得ることができたことが有意義であったと思います。

Ⅳ- 4 日本海のシャングリラ 柴田 登

平成 15 年の地域産業研究会の現地見学会の折、宿泊した寿都町大谷会館で寿都を「ことぶきのみやこ」と詠んだ額を目にした時、日本海のシャングリラという印象が閃いた。日本に浦島伝説があるように、ジェームズ・ヒルトンが「失われた地平線」に描いた、文明の喧騒を逃れて時間が緩やかに流れる理想郷。そのシャングリラの印象が今は北限のブナ林再生で共に手を組む島牧と黒松内にも広がっている。皆様も一緒に訪れてみませんか。

Ⅳ- 5 イベント要員で 岩村俊二

参加して 10 年近く、ほとんど研究はせずに誘われる所にはどこにでも行くイベント要員で終わりました。おかげさまで、あちこちで美味しいものを食べ、多くの素晴らしい知人を得ることができました。この貴重な経験を活かして食の研究会に少しでもお役に立てればと思っています。

V おわりに

平成9年にスタートした「地域産業研究会」は、この4月から「エゾシカ研究会」、「食産業研究会」として歩むことになりました。これまでの15年間にわたる地域産業研究会活動経過を残そうという会員からの意見があり、編集委員会を立ち上げ、検討をはじめ、コンサルタンツ北海道編集委員会から12頁の割り当てをいただき完成することができました。この頁数ではまだまだ書き足りませんが、別にDVDに「地域産業研究会活動記録」として関係資料を加えて報告の予定です。

さて15年はアットという間に過ぎてしまい、その間、会員の若返りができなかったことを反省し、両研究会には若返りを切望しています。

研究会は、いろんな立場で助け合って運営されますが、「量と質」も双方で評価されるようです。講演会や見学会を、量でみても中身がつまらなければ魅力がないと判断されるでしょう。地域産業研究会が活動史をまとめるのもその辺りに意味があります。

研究会は、多くの会員に支えられよくやってきました。幹事として会の運営にご苦労された方には本当に感謝です。見学会・調査・交流など、かなりの部分が手弁当(経費も含めて)でした。

活動史編集委員会は、伊藤恒雄・板垣恒夫・須川清一・柴田登・小野孝・小林一弥・岩村俊二の7名で取り纏めてきました。本当にご苦労さまでした。

(板垣恒夫)

VI 活動史

年月	全体活動	分科会				活動内容	コンサルタンツ北海道掲載等
		工	地	規	資		
97年	4月	○				「地域産業研究会発足」：北海道技術士センターの承認(船越元技術士の私的研究会「未来耕房」を引継ぐ)	03年101号
	4月	○				第1回定例会 講演会・討論会：「世界の農業と食料事情」	98年84号
	6月	○				第2回定例会 話題提供・討論会：「世界と日本の農業情勢、北海道農業の現状と課題」	98年84号
	6月	○				研究会設立：「地域産業研究会設立とご案内」と活動方針	97年82号
	8月	○				第3定例会 話題提供・討論会：①「公共事業削減論の背景と行政の対応」、②「地球環境と日本の森林」	98年84号
	9月	○				第4回定例会、現地研修会：①「洞爺村の現状と報告」土地改良推進室、②「地元から思うこと」他	98年84号
	10月	○				体制 技術士47名、部門別内訳は、農業18名、建設18名、応用理学5名、林業2名、衛生工学2名、水道2名、水産1名、電気1名、機械1名、部門重複3名	
	10月	○				研究会レポート：「発足後半年を経て活動を強化」テーマ 1)農村環境・農村景観・グリーンツーリズム他	97年83号
	10月	○				第5定例会 話題提供・討論会：①「農業土木の現状と課題」、②「洞爺村現地研修会報告」	98年84号
	12月	○				第6定例会 話題提供・討論会：①「水産の現状」、②「農業・農村問題の整理と今後の展望」	98年84号
	2月	○				研究会レポート：「農業、農村が抱える課題の理解をすすめる」	98年84号
	2月	○				地域産業研究会の1997年活動の報告	98年84号
98年	4月	○				第1回定例会 講演会・討論会：「北海道の能力分析」	99年87号
	5月	○				第2回定例会 話題提供・討論会：「これまでの北海道農業」	99年87号
	6月	○				第3回定例会 現地研修会：「北海道の酪農家」、新しい発想を実践するパイオニア的な酪農家の紹介	99年87号
	6月	○				特集(“ひとり立ちできるか? どうするHOKKAIDO”)後藤厚：「豊かさを実感させる」地域社会の建設	98年85号
	7月	○				第4回定例会 話題提供・討論会：「これからの北海道農業—基本的発想の転換」	99年87号
	9月	○				第5回定例会 講演会・討論会：「北海道の自立を考える地域からみた課題」 齊藤康雄氏(中札内農村委員会)	99年87号
	10月	○				第6回定例会 講演会・討論会：「産業としての北海道農業の未来」 瀬戸 篤氏(小樽商科大学助教授)	99年87号
	11月	○				第7回定例会 講演会・討論会：「農村に住んで思うこと」 佐々木寅雄氏(佐々木農村研究所)	99年87号
	11月	○	○			研究会レポート：「試される大地・エゾシカとの共生—明るい北海道の未来に向けて—」シンポジウムの企画	99年86号
	2月	○				特集(冬に生きる技術)：「自然冷熱エネルギーによる農産物貯蔵の意義」 船越 元	99年87号
	3月	○	○			シンポジウム：「試される大地・エゾシカとの共生—明るい北海道の未来に向けて—」【コーディネータ】船越元氏 【基調講演】「エゾシカ問題の現状と共生のあり方」 大泰司紀之氏(北大大学院獣医学研究科教授)、「パネルドスカッション」○エゾシカの生態について	99年88号
99年	4月	○	○	○		【分科会発足】地域活性化分科会・エゾシカ分科会	
	4月			○		地域活性化分科会は北海道の過疎地域活性化のための提言のまとめ。モデル都市として寿都町をとりあげ、担い手問題を中心に議論する。当分科会は岩崎幹事をリーダーとする。	99年88号
	9月	○	○			現地研修会：「西興部村エゾシカ食肉加工場の見学・試食」【見学先】 正和電工(永山)→ダイコロ飛行場(愛別)→森の美術館・養鹿牧場(西興部)→ホテル→エミュー牧場・木炭工場(下川)	99年89号 00年90号

年月	全体活動	分科会				活動内容	コンサルタント北海道掲載等
		工	地	規	資		
99年	10月					研究会レポート(分科会活動開始):【定例会】研修会「規制緩和について」、講師 小林薫和氏(北海道総合企画部構造改革推進室)、【エゾシカ分科会】第1回分科会「養鹿業実現へ向けての問題点整理」、第2回分科会、「エゾシカ管理と狩猟法」話題提供 車田利夫氏(北海道自然環境課)、第3回分科会、「養鹿の現状と問題点」話題提供 丹治専務理事(全日本養鹿協会)、伊藤正男氏(鹿追町畜産課)、関主幹(北海道自然環境課野生生物室)、【規制緩和分科会】新たに規制緩和分科会の発足。分科会長 油津雄夫・事務局 後藤厚	
	11月	○	○			現地研修会:「エゾシカを食べながら地域振興を考えよう」	00年90号
	11月	○	○			現地研修会:「寿都町における過疎化問題と活性化」地域活性化分科会会員9名と寿都町役場意見交換。地域資源をいかに活性化に繋げるか、有機農業の可能性、農業と漁業との融合などの話合い。	00年90号
	11月		○			ワークショップ:「寿都を知ろう・調べよう」寿都町(企画振興室長 他各産業の担当課長)	
	12月	○				講演会:「北海道の地域資源の有効利用」寺沢 実氏(北海道大学農学研究科教授)地域資源の有効利用としての森林資源の活用と農水畜産廃棄物の資源化について。	00年90号
00年	6月			○		講演会:「中心市街地活性化法について」三木一弘氏(北海道通産産業部 流通産業課)、参加者 20名	00年92号
	8月	○				現地研修会:「平成12年度第2回合同見学会」ニッカウスキー工場見学→泊原発(とまりん館)→湯別の湯→地元・交流会(夜)→弁慶岬→風力発電施設→旧家(佐藤家)→黒松内町(フナセンター)→トワペール(黒松内町・産品販売交流施設)→蘭越町・佐々木寅雄氏農家民宿でバーベキュー。	01年93号
	10月	○				第2回定例会:「最近の英国の農業事情」	01年93号
		○	○			ワークショップ:「寿都を知ろう・調べよう」寿都町役場(企画振興室長 他各産業の担当課長)	01年93号
	11月			○		講演会・討論会:「北海道における地域開発の課題ー規制のあり方をめぐってー」佐藤克廣氏(北海学園大学法学部教授)、話題提供 平松克之氏(当会会員・札幌市)、久保泰雄(江別市)	01年93号
	12月	○				第3回定例会:「地産地消」中島興世氏(恵庭図書館館長)	01年93号
01年	5月		○			地域活性化分科会:「平成12年度活動報告と平成13年度活動計画」	01年94号
	5月	○				第1回地域活性化分科会:研究会レポート・「ゴミがおもしろい、ゴミで人づくり、まちづくり」吉田俊昭氏(留萌市市民部長)	01年94号
	6月	○	○			現地交流会:寿都町カキ祭りにおける交流会 分科会テーマは「寿都を知ろう・調べよう・考えよう」である。交流を深めるために、カキ祭りに参加し、6月23日・24日には水産加工物産展を機会に交流会を行った。	01年95号
	9月	○				現地見学会:RS研究会共催、「循環型社会構築へ向けた地域の取り組み(留萌市)」留萌市・美サイクル館→苫前町・風力発電施設→沼田町・米穀低温貯留乾燥調整施設→ほろしん温泉・宿泊→芦別市・ゴミポスト→八紘牧場・バイオガスパラント→ハイランドふらのRDFボイラー	02年96号
	10月	○	○			地域の自立について考える(特集):「地域活性化と内発的な活力の発現」について 岩崎元彦	01年95号
	12月		○			ニュージーランド養鹿産業視察ツアー(6名)	02年96号 02年97号
02年	1月		○			講演会:「ニュージーランド養鹿産業視察団報告」	02年97号
	6月			○		研究会レポート:「電子掲示板の立ち上げ」平成13年度に身の回りの規制に係わる問題点について、共通する情報を整理するために電子掲示板を立ち上げた。	02年97号
	6月			○		研究会レポート:地域産業活性化活動地・寿都町との討論会 寿都町から山崎室長 他担当の課長	02年98号
	9月	○				現地見学会、RS研究会共催:「漁業を育て、地域を育てる」洞爺湖・臨湖実験所(昼食)→鹿部町・間欠泉公園→道立鹿部漁業研修所→北海道立栽培漁業総合センター→鹿部ロイヤルホテル(宿泊)→北檜山風力発電施設外→栽培漁業振興公社瀬棚事業所…(昼食)→北海道開発局美利河ダム	02年98号 03年99号
	10月	○	○			研究会レポート:エゾシカ分科会報告「シェフ・消費者向けアンケート結果」	03年99号
03年	5月	○				第1回定例会 講演会:「硝子工作にみる驚き」清野和夫氏(元北海道大学触媒化学研究センター技官)	03年101号
	7月	○				第2回定例会 講演会:「パイオアイランド北海道、技術士の仕事の成果と方向性」浅野行蔵氏(北海道大学大学院農学研究科教授)	03年101号
	8月			○		報告会:美しい海づくり研究:地域住民とともに取り組める活性化の「芽」を探し出すために、海調査・山一川調査・農地ー都市調査をグループ毎に行い、報告会を実施した。	04年103号
	9月	○		○		第3回定例会 講演会と討論会:「規制緩和、その後の状況」広畑雄三氏(北海道農業会議)。「農地転用してオープンしたレストランの事例について」千場一正氏(南クレスガーデン 代表取締役)。	04年102号
04年	2月	○				講演会:「私が大好きな農村のあれこれ」長尾道子氏(食濃わくわくネットワーク北海道事務局長)	04年103号
	4月		○			提言集発刊:「エゾシカ飼うべ」。1999年から、エゾシカを対象として養鹿産業の創生・振興による中山間地の地域振興に関する研究に取り組みについての著書の発刊	(社)日本技術士会 北海道支部・北海道技術士センター
	4月		○			エゾシカ越冬地観察会:エゾシカ飼育方法検討(エゾシカ生態を知るため)のため、「芦別市滝里ダム湖周辺」の森林で調査。成果として、越冬地場所観察・エゾシカ確認・低コスト飼育法検討の資料。	04年103号
	8月			○		自然体験学習(指導):寿都町自然体験学習 サポート参加	05年105号
	9月	○				31回技術士全国大会(札幌)・第2分科会「地域振興〜地域活性化へのプログラム」の発表	04年104号
	6月		○			根室支庁主催2回、NPO北海道振興機構主催1回の普及講演会で「エゾシカ飼うべ」を講演	05年105号
	10月	○				第2回定例会 講演会:「北海道の食産業の現状と課題」貫田桂一氏(ホテルグラビー料理長)、「地域づくりは食おこし」を念頭に、身近にある食材を見直すことが原点にあることを示された。	05年105号
	11月	○				第3回定例会 講演会:「北海道立工業試験場による地場企業への技術支援」尾谷 賢氏(北海道立工業試験場 技術支援センター所長)	05年105号
05年	2月	○	○			海外視察:「ニュージーランドの養鹿」、北海道が主体となったニュージーランド養鹿視察に研究会から2名参加。	05年106号
	3月	○	○			特別講演:「ニュージーランド養鹿視察ツアー特別報告・ーNZの生育するシカの実体ー」小林隆彦氏(北海道環境生活部環境室 自然環境課野生鳥獣グループ主査)	05年106号
	5月		○			札幌ロータリークラブで講演:「エゾシカ飼うべ」の話題提供	
	7月	○				第1回食の討論会:地域産業研究会の「身近にある食料問題」について	05年107号

年月		全体活動	分科会				活動内容	コンサルタンツ 北海道掲載等
			工	地	規	資		
05年	9月		○				日本畜産学会札幌大会の「日本鹿研究会シンポジウム」で「養鹿を実現するには何が必要か」と題して講演	
	10月	○					名簿廃止：(社)技術士会北海道支部 毎年10月発行の会員名簿を廃止。	05年107号
	11月	○	○				見学会：「道央地方に迫るエゾシカ問題・被害の実態と有効活用を探る」①株式会社 静内「食美楽」新冠事業所、②静内町・ホテルローレル、③静内町・スーパーマーケット PURE、④北海道大学 静内研究牧場。	06年108号
	12月	○		○			第1回寿都町マリニビジョン協議会参加：寿都地域マリニビジョン協議会にオブザーバで2名参加。	
06年	1月	○					第2回食の討論会：「農業ビジネスの可能性」小田たず子氏(NPO法人農業応援団アグリビレッジ理事)	06年109号
	4月	○					特別講演会：「アジアの経済発展と日本・北海道」海老名 誠氏(小樽商科大学教授 ビジネス創造センター長)	06年109号
	6月	○					第3回食の討論会：「地方発 環境再生ベンチャー企業の挑戦」小磯修二(釧路公立大学教授)	06年110号
	10月	○					見学会：リサイクル施設の視察 町村牧場株式会社マテック札幌グランドホテル	06年111号
	11月					○	健康・循環型社会班：地域活性化分科会において活動開始	
	11月	○					第4回食の討論会：「新たな食と農業への挑戦」小谷栄二氏(ファームエイジ㈱代表取締役)	06年111号
	11月	○					現地見学会：札幌市内のリサイクル施設	
	12月			○			施設見学：豊富のハマボウフウの軟化栽培施設	07年112号
07年	3月	○					特別講演：「山河あり、ふるさとに夢をかけた男 中田鉄治」津島 慧氏(プランニング・フォー・ザ・フューチャ代表)	08年114号
	4月	○					組織統合：北海道技術士センターと日本技術士会北海道支部は、平成18年の(社)日本技術士会北海道支部臨時総会において「組織統合案」が可決され、平成19年4月1日に(社)日本技術士会北海道支部に統合	07年111号
	5月			○			豊富のハマボウフウの露地栽培の視察と栽培実験のための地下茎の収穫	
	6～11月			○			浜ボウフウの栽培実験(東区丘珠、北島農園) 浜ボウフウ実験栽培：種まき、株と種子の植え付けから軟化栽培実験と試食。	08年115号
	6月	○					第5回食の討論会：「そばを活用した町づくり」森谷 廣氏(幌加内町長)	07年113号
	7～8月			○			現地調査：「寿都町歴史資源調査」2回実施 土蔵・倉庫群・神社仏閣・歴史的建造物の保存状況の現況把握(外郭)を行った。	寿都町誌 07年113号 H20年度地域資源 調査報告書
	7月		○				情報交換会：シカ肉にかかわる情報交換会と「シカ肉試食・評価」	07年113号
	8月		○				「日本醸友会札幌支部、北海道産ワイン懇談会共催の北海道醸造技術研究会の例会で招待講演：“「エゾシカ飼うべ」が北海道を救う”	
	10月	○					第6回食の討論会：「これからの北海道農業に期待するもの」大熊久美子氏(NPO法人 北海道食自給ネットワーク 事務局長)	08年114号
	10月		○				えりも町営牧場・新冠町(仮称)大川牧場予定地視察	
	12月			○			浜ボウフウの栽培実験：自然の浜への移植(石狩、留萌、苫小牧)と軟化栽培の実験	08年115号
08年	2月	○					第7回食の討論会：「食と地域活性化を繋ぐ」井与田浩司氏(伊達市・㈱アップデート取締役)	08年115号
	4月	○					特別講演：「北海道農業の展望—循環型農業を求めて—」干場信司氏(酪農学園大学教授)	08年115号
	4月	○	○				現地見学会：「ミズナラ巨木と月越山脈のブナ林」	08年115号 09年118号
	7月	○					第8回食の討論会：「お米でオンラインワンに… “これまで20年の挑戦、そしてこれから” 高嶋浩一氏(北広島市・㈱タカシマファーム経営)、㈱タカシマファームを訪ね、合鴨農法等の見学と講演と討論	08年116号
	7月	○	○				現地見学会：「リゾートの灯は消えても… (空知管内浦臼町)」、北海道ワインと神内ファーム見学	08年116号
	10月			○			現地見学会：「もっと知ろう展・2008 “島牧村のブナ林へようこそ” 国有林及び島牧村からも参加	09年117号
	10月			○			北限ブナ林観察会：「寿都町(大和の沢・滝ノ瀧)ブナ林の更新状況等観察」	
	11月			○			現地調査：島牧村と共同で「賀老台地ブナ更新調査」 春木雅寛北大准教授、野崎泰生副村長等の参加	
	11～12月			○			ハマボウフウ軟化栽培実験：定山溪で温泉熱利用の栽培実験、12月には収穫しホテルに食材として提供	09年117号
09年	1月	○	○				技術発表：平成20年度北の国・森林づくり技術交流発表会。「海と山の森づくり」 蛭沢隆彦氏・土開直樹氏(寿都町)参加	
	1月			○			現地交流会：寿都町・黒松内町・島牧村・後志森林管理署・北海道大学・技術士会地域産業研究会で懇談会を実施、各市町村長、新川幸夫黒松内ブナ林再生委員会委員長、木谷三男後志森林管理署長、春木雅寛北大准教授	
	3月	○					現地打合せ：「21年度活動計画打ち合わせ」 島牧村(藤澤村長他)・寿都町(東野副村長)と地域産業研究会メンバーで協議	
	3月	○	○				第11回北東3支部技術士交流会：テーマ「里山・里海～海は山の恋人 一川は仲人～里山、里海を考える」研修発表会 地域活性化分科会の活動を紹介：「地域と共に学び、共に感じ、共に創る」活動	
	3月		○				道主催「エゾシカ有効活用ファールーム」で「ビジネスとしての可能性」と題して講演	
	4月	○	○				現地見学会：「野鼠類による“ブナの実”置き忘れが寿都町のブナ林を再生する」、ミズナラ巨木と攪乱地のブナ更新地の見学。	09年118号
	4月	○					総会 特別講演会：「豊かな資源と人の温もりを育む村づくり」 藤澤 克氏(島牧村村長)	09年118号
	4～7月			○			浜ボウフウの軟化栽培実験：保養センター及び定山溪のホテル数力所で栽培及び試食	10年120号
	4～7月				○		活動計画：「道内バイオマス資源循環普及促進活動の実施」	
	4月				○		現地視察：ほたてウロ含有カドミウム電気分解処理(渡島管内森町)	
	5月			○			研究会発足：北海道ハマボウフウを再生する会を立ち上げる(会長 岡橋技術士)、会員20名	

年月	全体活動	分科会				活動内容	コンサルタンツ北海道掲載等
		工	地	規	資		
09 年	5 月				○	バイオマス肥料資源化研究開発企業から支援要請	
	6 月			○		自然体験学習(指導):寿都町自然体験学習 春サポート参加	
	7 月			○		内部講師講演:「南後志 北限 プナ林見学会に向けて”後志 3 町村(島牧村・寿都町・黒松内町)森林資源について”」板垣恒夫氏	09 年 119 号
	8 月		○			現地情報交換会:「東京農業大学網走キャンパスに増子教授を訪問 鹿茸および他部位の製品可能性・最近の養鹿業の現状について」	
	8 月		○			エゾシカ廃棄部位を用いた缶詰製品の試食および意見交換	
	8 月				○	定例会(勉強会):「生ごみ収集幼生分解性プラスチック袋について」、製造メーカを講師に勉強会	
	9 月	○				現地見学会:「人から人へつなぐ、森づくり・町(村)づくり・人づくり”南後志 北限 プナ林”(黒松内町・寿都町・島牧村)」	09 年 119 号
	10 月				○	食品残渣有機肥料化農業法人から関連団体の設立支援要請	
	11 月			○		自然体験学習(指導):寿都町自然体験学習 秋サポート参加	
	11 月			○		現地打合せ:「意見交換(技術士へのニーズと今後の活動)」、島牧村(野崎副村長・金子産業課長)・寿都町(瀧山産業振興課長他)・黒松内町(木村首席)、後志森林管理署黒松内事務所(井上純首席森林官)	
	12 月				○	「バイオマス有機肥料化と健康促進について」、管理栄養士を講師に勉強会	
	12 月			○		研究報告:「浜ボウフウ実験栽培」定山溪で温泉熱を利用して栽培し収穫したハマボウフウの試食会を黄金湯温泉で開催。	09 年 117 号
10 年	1 月	○				体制 会長:伊藤恒雄、副会長:板垣恒夫、幹事長:須川清一、会計:小林一弥、幹事、五十嵐俊彦(エゾシカ分科会座長)、岩村俊二、今井惇一、柴田 登(地域活性化分科会座長)、住友 寛、岩崎元彦、鎌田貢次、豊谷勝雄、橋本昭夫(資源・環境・健康分科会座長)、細川康司	
	4 月 16 日	○				特別講演:「森林・林業の動向について」 木谷三男氏(北海道森林管理局 後志森林管理署 署長)	10 年 121 号
	6 月	○				巻頭言:「地域の活性化に思う」 伊藤恒雄	10 年 121 号
	6 月	○	○			島牧村の賀老高原で植樹会参加:村長、教育長、教員、小学生、板垣恒夫、岩村俊二	11 年 125 号
	7 月 10 日	○				第 9 回食の討論会:「羊を通して食の問題を考える」 武藤浩史氏(白糠町・旬茶路めん羊牧場経営) カフェレストラン「カフェドトキ」で講演と意見交換と試食会を開催	10 年 122 号
	9 月 17 日	○				第 10 回食の討論会:「地域資源を考えるー黒松内町の多様な資源ー」 伊藤恒雄	10 年 122 号
	10 月 1 日 ～2 日			○		見学会:「豊かな自然の魅力を活かした持続可能なまちづくりー黒松内の北限のプナ林見学と移住者の暮らし訪問ー」	11 年 123 号
11 年	2 月 4 日	○			○	第 10 回食の討論会:「亜臨界肥料化技術で北海道を元気に」 橋本昭夫氏	11 年 124 号
	4 月	○				特別講演:「北海道を北限とする樹木の生態ーフィールドでの調査でわかったこと」 並川寛司氏(北海道教育大学教育学部 教授)	11 年 124 号
	4 月	○				技術士会本会 法人名変更:社団法人 日本技術士会は公益社団法人に向けての認定申請中であったが、4 月 11 日付けで登記を完了	
	7 月	○				第 13 回食の討論会:地域連携による農産加工 講師 酪農学園大学 筒井准教授 大学と技術士の連携と「地域の連携」の実践。	11 年 125 号
	9 月	○	○			第 14 回 北東 3 地域本部技術士交流研修会 in 富山での分科会「地元で根付く産業・技術」において:「北海道における養鹿業の現状と課題について」研修発表、発表者 細川康司	
	9 月	○	○			第 14 回食の討論会(内部講師講演):地域水産資源の販路拡大と技術士のできることー乙部、寿都、穂別での地域資源を使った商品開発と販路拡大の経験からー、講師:豊谷勝雄氏(マツコンサルタント株式会社代表取締役)	11 年 125 号
	11 月	○				社会への発信:「北海道におけるエゾシカ問題と養鹿業」	2011 年 PE IPEJ JOURNAL 2011

分科会活動 工:エゾシカ分科会 地:地域活性化分科会 規:規制緩和分科会 資:資源・環境・健康分科会